人間環境学府

Ⅰ　教育の水準　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　教育 5-2

Ⅱ　質の向上度　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　教育 5-4

Ⅰ　教育の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ　教育活動の状況

〔判定〕　期待される水準にある

〔判断理由〕

観点１－１「教育実施体制」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

○　学際研究教育コーディネーター委員会を設置し、専攻を超えた教員のチームにより学際研究と教育を連携させる多分野連携プログラム等を中心とする学際教育研究活動を行っている。

○　学際教育を中心としたファカルティ・ディベロップメント（FD）の開催、異なる専門分野の教員が合同授業を行うファカルティ・カップリング、多分野連携プログラム等を実施しており、平成 26 年度及び平成 27 年度の修了生アンケートの結果では、多様な価値観や考え方を受け入れることが身に付いたとする回答が平成 26 年度は 88%、平成 27 年度は 94%となっている。

○　平成 22 年度から平成 24 年度に「アジア持続都市システム学教育コアの国際化推進」に取り組み、ハビタット工学教育プログラムが平成 24 年日本建築学会教育賞（教育貢献）を受賞している。

観点１－２「教育内容・方法」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

○　多分野連携プログラム、ファカルティ・カップリング、複数の専攻との連携による持続都市建築システムプログラム等を実施し、学際教育に関する授業内容を充実させている。

○　国際的な視野を持つ人材を育成することを目的として、海外の学生との共同作業やディスカッションを通して短期間で提案をまとめるワークショップ Sustainable Design Camp を実施している。

○　学府内外の相互交流による議論を通して、人間環境学を支える人材の育成を目指す学生主体による「人間環境学コロキウム」を毎年度開催している。

以上の状況等及び人間環境学府の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

〔判定〕　期待される水準にある

〔判断理由〕

観点２－１「学業の成果」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

○　平成 22 年度から平成 26 年度における標準修業年限内での修了率は、修士課程は 76.5％から 89.0％、専門職学位課程は 96.6％から 100.0％、博士後期課程は 11.9％から 22.4％の間を推移している。

○　平成 22 年度から平成 25 年度における修了生の臨床心理士資格試験の合格率は 88.5％から 100％の間を推移しており、各年度とも臨床心理士資格試験全体の合格率を上回っている。

観点２－２「進路・就職の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

○　平成 22 年度から平成 26 年度における修士課程修了生の就職率は 90％以上で推移しており、博士後期課程修了生及び単位取得退学者の就職率は 55.6％から 80.0％の間を推移している。

○　平成 27 年３月に実施した修了生アンケートの結果では、大学院での教育で身に付いた能力について、肯定的回答の割合が「専門的技術や知識」は 95％、「多様な価値観や考え方を受け入れること」は 88％となっている。

以上の状況等及び人間環境学府の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

Ⅱ　質の向上度

１．質の向上度

〔判定〕　質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「教育活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

○　学際研究と教育を連携させる多分野連携プログラムや、異なる専門分野の教員がペアを組んで行う合同授業のファカルティ･カップリング等を実施している。

○　教員や学生が各教員の研究内容を理解しやすくすることにより、学際的教育・研究を促進する取組として、学生インタビューに基づく人間環境学リファレンスの発行やウェブサイトによる人間環境学教員マトリックスの構築を行っている。

分析項目Ⅱ「教育成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

○　平成 24 年度に日本学術振興会育志賞を受賞するなど、第２期中期目標期間の学生の学会賞等の受賞件数は合計 53 件となっている。

これらに加え、第１期中期目標期間の現況分析における教育水準の結果も勘案し、総合的に判定した。